

# FD NEWS

No.20 2007年3月30日  
摂南大学FD委員会  
〒572-8508 寝屋川市池田中町17-8  
TEL: 072-839-9106  
E-mail: kyomu@ofc.setsunan.ac.jp

## 摂南大学

### 教育貢献表彰制度

FD委員会(SG3)委員・工学部FD委員 渡会征三

工学部では2005年度の教授会で「工学部教育貢献表彰に関する申し合わせ」を採択した。次いで2006年度には表彰を行うための「工学部教育貢献表彰推薦委員会」を設置し、委員会での討議を重ねて2007年3月に工学部教員の教育貢献表彰を実施した。その詳細は後日の工学部FD委員会からの報告に委ねここでは他大学の実施状況などを概観し、表彰制度の意義やFD活動への関わりなどを考察する。

そもそも工学部で教育貢献表彰制度を取り上げたきっかけはJABEE(日本技術者教育認定機構)の受審準備に起因する。JABEEでは工学教育プログラムの実効性を補償するためのPDCAサイクル(plan-do-check-act cycle)の実施を重要視している。従ってJABEEの認定を受けようとする機関は教育活動の中に効果的なFD(Faculty Development)システムを構築し、絶えず教育改善を実施し続ける必要性に迫られる。教育貢献表彰制度はその改善のための自己点検システムの一つである。

他大学で一足早く教育貢献表彰制度を実施している例が少なからず見られる。山口大学工学部では「教育業績表彰制度」としてカリキュラム以外の教育活動(例えば学生の自習支援、教育論文の投稿など)において優れた業績をあげた工学部教員の表彰制度を設けている。大阪産業大学では「教え上手な教員表彰制度」を作り、インターネットによる学生の投票で受賞教員を選定している。武蔵工業大学では研究業績評価だけではなく教育業績評価制度も取り入れて教員の教育力向上や教育改善に努める、としている。明海大学ではFDの理念のもと「教育貢献特別賞(Teacher of the Year)」受賞者を各学部から教員一人ずつ選んでいる。

一方「FD活動の義務化」はまず大学院において2007年度からその実施を要求され、大学学部においては一年遅れで2008年度から実施される見込みである。さらに「大学の第三者評価」も目前に迫っており、外部からの教育改善に関する注目度は増すばかりである。大学冬の時代の荒波に強く晒されている工学部は嫌が応でもFDの推進に積極的に取り組まざるを得ない状況下にある。

今回の摂南大学工学部教育貢献表彰では、3つの受賞部門を設けて受賞者を決めている。部門1では「教員の自薦・他薦による主として教育改善やシステム構築をなした教員」、部門2では全学で実施されている「学生による(無記名の)授業アンケートで高い評価を受けた教員」、部門3では工学部で独自に実施した学生の記名投票による「分かりやすい授業を行った教員の選定」が対象となっている。このように幅広い部門にわたって受賞選考がなされている点では独自性の強い制度といえよう。

教育貢献表彰制度はFDの一つの手段であって、目標はあくまで「良い授業・教育」である。工学部の今回の試みがこの方向にどのように寄与して行くのか今後の課題となろう。

## 2006年度後期「学生による授業アンケート」実施結果

FD委員会（SG1）工学部・川野常夫、外国語学部・西川眞由美

### 実施状況

2006年度の学生による後期授業アンケートが、後期末の11月27日（月）～12月9日（土）の2週間にわたって実施された。対象は本学の全学部・学科（T部C, A, E, M, Bの各学科およびL, I, Y, Jの各学部）<sup>注1</sup>である。2005年度から授業アンケートは、教員全員の科目について実施するのではなく、教員コード番号の奇数、偶数によって2グループに分けて実施されてきた。2006年度は、昨年度の前後期の順を逆に、前期が偶数の教員コードが対象であったので、今回の後期は奇数の教員コード番号の教員が担当する科目を対象として実施された。（ただし、これまでと同様にC科のみ全科目について実施された。）

アンケートの内容は、2005年度に実施された内容に一部修正が加えたもので、今年度の前期と全く同じ内容であった。まず、共通質問項目は1項目追加され、設問1～7となった。設問8, 9は学部個別質問項目として設けられたが、実際に設問を設けるかどうかは各学部の意向に任せられた。設問10～14は各科教室個別質問項目、あるいは教員個人用の項目として設定された。この場合も実際に設問を設けるかどうかは、それぞれの意向に任せられた。一方、自由記述式の回答欄は、2005年度に比べて大幅に変更された。学生が答え易いように以下の4項目に細分し、それぞれについて回答するスペースを設けられた。

- (1) この授業の満足できた点：
- (2) この授業の改善すべき点：
- (3) この教室（ 教室）の設備などの改善すべき点：
- (4) その他の感想など：

今回（2006後）<sup>注2</sup>の授業アンケート参加教員比率は100%（2006前93.5%、2005後99.1%、2005前100%）であった。アンケート対象授業科目数は666科目。従来の授業科目数は、2006前664科目、2005後681科目であった。回答者延人数は20,306人（2006前20,126人、2005後18,607人）。その回答率（回答者延数/履修登録者実数）は63.0%（2006前69.4%、2005後58.4%）であった。回答者延人数は2006前と比較して約0.9%の増、2005後より約9.1%の増となっている。回答率は2006前よりも6.4ポイント、2005後よりも4.6ポイントの増となっている。参加教員数や学生の回答者数のこのような増減は、一時的なものと思われるが、今後どのような傾向をたどるかは、今後の調査結果を待たねばならない。

注1...T：工学部（C：都市環境システム工学科、A：建築学科、E：電気電子工学科、M：機械工学科、B：マネジメントシステム工学科）、L：外国語学部、I：経営情報学部、Y：薬学部、J：法学部

注2...上記本文の（ ）内では、2006年度前期を2006前、2005年度前期、後期をそれぞれ、2005前、2005後と記している。以下、同じ。

### アンケート結果概要

学部・学科ごとの評価の最小値・最大値・平均値および設問7との相関係数を表1に示す。今回は、設問6「この授業を受講した教室の設備は整っていた。」がひとつ増えて7項目となっている。また、設問3は、昨年度まで、「教員は、学生からの質問や疑問に誠実に答えていた。」であったが、「教員は、熱意を持ってこの授業を進めていた。」に変更された。したがって、過去のデータと比較するとき、注意が必要である。表のうち、（ ）内の数値は2006年度前期、[ ]内の数値は2005年度後期、{ }内の数値は2005年度前期の数値をそれぞれ表している。

表1 学部・学科ごとの評価の最小値，最大値，平均値，および設問7との相関係数

問	項目	最小値	最大値	平均値	相関係数
A1	出席状況	4.26(4.24)[4.12]{4.27}	4.68(4.68)[4.66]{4.66}	4.47(4.46)[4.41]{4.47}	0.17(0.14)[0.14]{0.14}
A2	学生の意欲	3.75(3.62)[3.65]{3.64}	4.10(4.07)[4.04]{3.94}	3.95(3.87)[3.90]{3.80}	0.63(0.60)[0.61]{0.62}
A3	教員の熱意	3.81(3.88)[3.75]{3.61}	4.27(4.30)[4.24]{3.96}	4.09(4.00)[3.92]{3.78}	0.72(0.71)[0.75]{0.74}
A4	教員の工夫	3.57(3.58)[3.70]{3.52}	4.11(4.10)[4.17]{3.83}	3.88(3.74)[3.80]{3.69}	0.79(0.79)[0.81]{0.80}
A5	教員の話し方	3.51(3.51)[3.55]{3.47}	4.06(4.04)[4.15]{3.78}	3.79(3.64)[3.73]{3.62}	0.80(0.80)[0.83]{0.81}
A6	設備	3.60(3.60)	3.99(4.05)	3.78(3.75)	0.57(0.54)
A7	学生の満足度	3.52(3.55)[3.58]{3.47}	4.08(4.05)[4.15]{3.78}	3.84(3.70)[3.78]{3.62}	-

### - 1 学生の評価

表1より，今回の設問の中で，最小値，最大値，平均値のいずれも高い評価値を示しているのは A1 の「出席状況」であるが，A7 の「学生の満足度」との相関は他とかけ離れて最小の値となっている。これは，出席はしているが，そのことが満足度とは無関係であることを意味している。このような傾向は，過去の3期も同様となっている。次に高い評価値を示しているのは，A3「教員の熱意」である。この設問は昨年までとは表現が異なるため，単純に比較はできないが，過去3期のいずれの値よりも大きい値となっている。この評価が高いのは，多くの教員が熱意を持って真剣に授業に取り組んでいることの現れであると考えられる。学生の満足度との相関係数も 0.72 と高くなっている。

一方，A5 の「教員の話し方が明瞭でわかりやすかった」は A6 の「設備」を除いて最も低い値となっている。先に述べた A3 の「熱意」に関する評価と合わせると，「授業に対する熱意の感じられる先生でも，話し方がわかりにくい先生がおられる。」ということになる。この「話し方がわかりにくい」という評価の中には，話し方が単に不明瞭であるという評価以外にも，教員が用いる言葉が学力の低下した最近の学生には通じにくくなっていることによる評価が含まれることも考えられる。2005 年度と 2006 年度の4期の値 3.79(3.64)[3.73]{3.62}は，教員コードが奇数(偶数)[偶数]{奇数}の結果であることを考えれば，奇数，偶数の優劣はつけがたく，別の要因による変動にすぎないと言える。

設問 A6 以外の 6 つの質問項目についてこれまでの 4 期の平均値を見ると，ほとんどの項目について，2005 年度の前期よりも 2006 年度の前期の方が高く 2005 年度の後期よりも 2006 年度の後期の方が高い値となっていることがわかる。これは授業改善の効果の現れであるといえる。いずれも教員コードの奇数，偶数の違いは認められない。

### - 2 アンケート結果の分析

#### -2-1 出席率および学生の意欲の違いによる比較

出席率のよい学生とよくない学生でアンケート結果がどのように異なるか，また，授業に対する学生の意欲の高い学生と低い学生でどのように異なるかを前期と同様に分析した。出席率については，設問 1 で 40%以上と回答した学生と 40%未満と回答した学生に分けて，A1 から A9 の各設問における評価の平均値と標準偏差を求めた。また，学生の意欲については，設問 2 の回答が評価 3～5 の学生（意欲あり）と，評価 1 または 2 の学生（意欲なし）に分けて，同様に A1 から A9 の各設問における評価の平均値と標準偏差を求めた。

この結果，出席率のよくない学生は，学生自らの評価も教員に対する評価も否定的であることがわかった。これは出席をしていない学生がまともに回答できていない現れであると考えられる。言い換えれば，出席率の低い学生は授業に対して正当な評価ができないため，集計から除くべきであると考えられる。しかし出席率が 40%未満の述べ人数は 119 名で 40%以上の 20,088 名に比べて 1%にも満たないため，大勢には影響がないことがわかった。また，意欲の少ない学生も全体的に否定的な回答をしていることがわかった。

## -2-2 学生の満足度と諸要因との関係

学生の授業の満足度（質問項目 A7）と諸要因との関係について調査・検討した。

### (1) 履修登録者数と満足度との関係

履修登録者を「20人ずつ」に分けて11段階にて調査した。その結果、学部・学科ごとにばらつきがあるものの履修登録者数が増加するにつれておおよそ満足度が低くなる傾向がある（20人未満の履修登録者の平均満足度は4.26と最も高い）。全体の平均値では、過去の3期と大きな変化は認められなかった。また、人数が少ない場合でも満足度の低いケースも認められ、少人数の授業の場合、評価のばらつきが大きいことが特徴的であった。

### (2) 教員年齢と満足度との関係

教員年齢を「5歳ずつ」に分けて10段階で調査した。概ね教員年齢が高いほど満足度は低い値を示している。満足度が最も高いのは「70歳以上」の4.51で、これは該当教員の特性によるものと考えられる。次に高いのは「30歳未満」であり4.15であった。一方、最も低いのは、「65歳以上70歳未満」の3.66（2006前は3.47、2005後は60-65歳で3.51）であった。過去3期と比べるとそれぞれ値が増減しており、期ごとの傾向は特に認められない。

### (3) 職階別満足度との関係

職階を「教授」、「助教授」および「講師」の3区分で本学の専任について調査した。満足度は「教授」3.67（2006前3.62、2005後3.69）、「助教授」3.90（2006前3.83、2005後3.78）、「講師」4.02（2006前4.07、2005後4.22）の順で満足度は高くなり、職階とは反対となる。

### (4) 授業時間と満足度との関係

授業時間を「1限」から「5限」に分けて調査した。学部、学科にて満足度の高い時限は異なっているものの、今回の2006年後期は「5限」の満足度が最も高かった（2006前は「1限」、2005後も「1限」）。しかし、「1限」～「5限」の満足度は、3.81～3.93（2006前は3.66～3.78）の間に分布しており、時限による大きな違いはないと考えられる。

### (5) 選択・必修別と満足度との関係

満足度の関係を「選択科目」と「必修科目」に分けて調査した。満足度の平均は「選択科目」で3.81（2006前3.7、2005後3.77）、「必修科目」が3.96（2006前3.8、2005後3.82）であり、「必修科目」が「選択科目」を平均値では上回り、従来と同じ傾向を示している。

### (6) 科目分類別と満足度との関係

科目の分類を「専門」、「専門関連」、「基礎」、「教養」および「教職」の5分類に分けて満足度との関係を調査した。「教職」の満足度が最も高く4.32であった。2006年前の最高値が「基礎科目」

であったのを除けば、これまでと同様の結果となった。また、「専門関連」の満足度が3.67と最も低い。これも過去3期と同じ傾向である（2006前3.4、2005後3.41）。なお、「専門」は3.83、（2006前3.74、2005後3.79）、「教養」は3.89（2006前3.66、2005後3.67）と高い値であった。

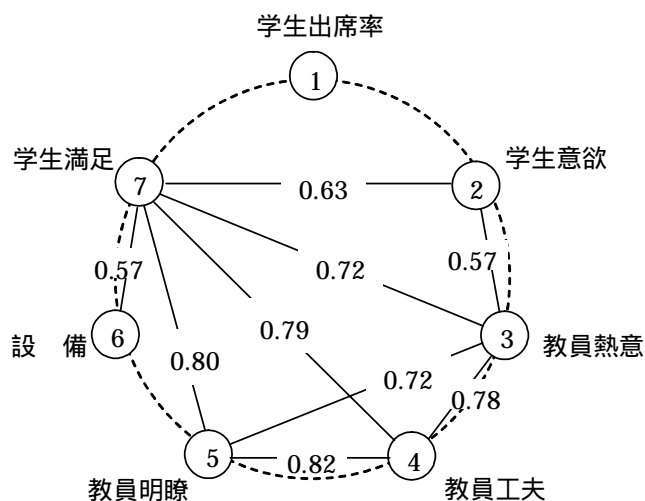


図1. 設問どうして相関の強い関係 (r = 0.57)

### -2-3 質問項目間の相関

大学全体の共通質問項目である設問 A1 から A7 までを対象として、互いの相関を調査した。相関係数の中で 0.57 以上のものを拾い出し、互いの関係がわかりやすくなるように図式化したものを図 1 に示す。図では各設問を円周上に配置し、相関係数で 0.57 以上の関係があるものを対角線で結んでいる。図から、学生の意欲、教員の熱意、教員の工夫、教員の話し方が明瞭、設備の 5 項目が学生の満足度と相関があることがよくわかる。すなわち、学生に意欲があり、教員に熱意と工夫があつて、話し方が明瞭で、設備がよければ、学生は満足するということになる。学生の出席率と各設問との間の相関は認められない。(学部毎の図は末尾の付録参照)

### -3 結果の要約

学生の評価値の平均値が高かったのは、「自分の出席状況」と「教員の授業に対する熱意」であった。

学生の評価値の平均値が低かったのは、「この授業を受講した教室の設備は整っていた」であったが、前期とほぼ同じ評価値であった。その次に低いのは「教員の話し方が明瞭でわかりやすかった」であった。教員によっては「授業に対する熱意」はあるが、「話し方がわかりにくい」と評価される場合があることになる。

出席率の低い学生（意欲の少ない学生）の評価は、ほとんどが 3 以下で否定的であった。

全体として、履修登録者数が少ないほど満足度が高くなる傾向があるが、履修登録者数が少ない科目の評価はばらつきが非常に大きい。

概ね、教員年齢が増すにしたがい、また職階が高くなるほど満足度は下がる傾向を示すもののそれほど顕著なものではない。

授業の開講時限による満足度の違いは認められない。

選択科目より必修科目で満足度は高くなっている。

学生に意欲があつて（学生の意欲を高めて）、教員の熱意があり、教員が工夫をし、話し方が明瞭で、設備がよければ、学生の満足度は高くなる。

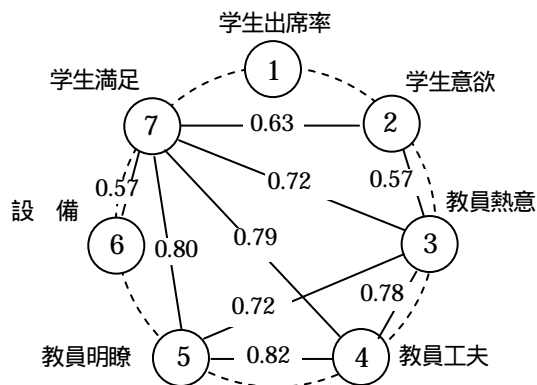
### おわりに

今回は、教員コードが奇数の教員が担当する科目について、学生による授業アンケートを実施した。奇数・偶数のグループに分けて 4 期目となるが、アンケート結果には特に目立った変化はなかった。前回と同様にアンケート結果の分析方法を追加して、出席率の良し悪し、学生の意欲のあるなしで比較などを行った結果、出席率が低く意欲の少ない学生のアンケート評価は、ほとんどが評価 3 以下で、否定的であるという前回と同じ結果となった。このような学生や欠席をしている学生を含めて約 4 割の学生を、今後どのように指導するかが問題である。

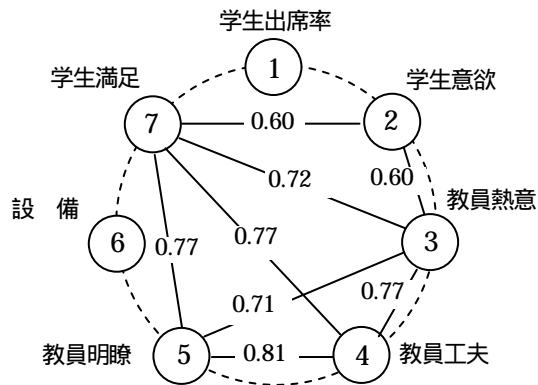
また、学生は教員に対して、「先生の熱意」は感じるが「話し方はわかりにくい」と評価している場合がある。この評価の中には、単に話し方が不明瞭であるという以外にも、教員が用いる言葉が学力の低下した最近の学生には通じにくくなっていることによる評価が含まれることも考えられる。よりわかりやすい用語、より噛み砕いた説明が必要であることが示唆される。

さらに、少人数教育は学生の満足度が高いと思われがちであるが、満足度の高い評価がある一方で低い評価もあることから、少人数教育であっても学生の満足度を高める工夫が必要であると考えられる。最後に、アンケート結果の相関分析から、学生に意欲があつて（学生の意欲を高めて）、教員の熱意があり、教員が工夫をし、話し方が明瞭で、設備がよければ、学生の満足度は高くなるという結果が出たが、これはごく当然の結果であり、この当然のことに実行していくことが大事であると思われる。

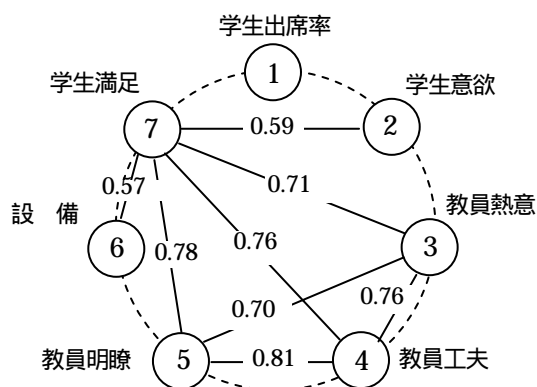
(付 録) 学生による授業評価アンケートにおける設問間の相関  
 - 2006年度後期, 各学部における設問どうしで相関の強い関係( $r = 0.57$ ) -



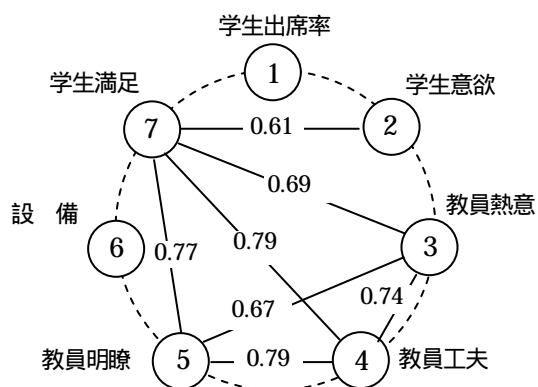
(a)大学全体



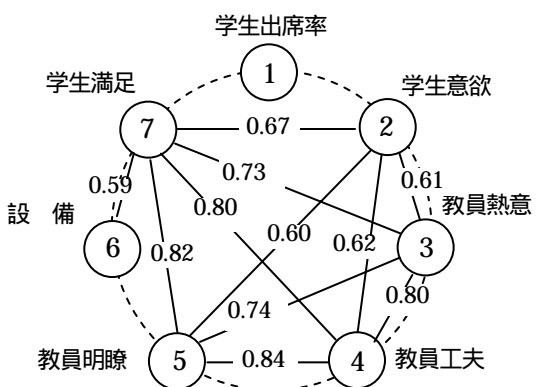
(d)経営情報学部



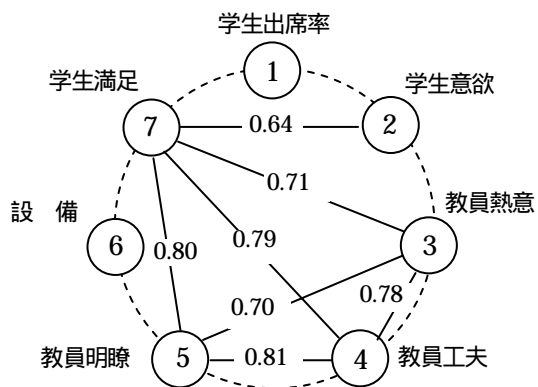
(b)工学部



(e)薬学部



(c)外国語学部



(f)法学部

## 工学部授業公開報告

FD 委員会委員 工学部 熊谷樹一郎

### 1. 授業公開の実施にあたって

本年度の授業公開の実施にあたって、工学部 FD 委員会ではさまざまな議論があった。最も問題視されたことは、従来は公開された授業への参観者が少なく、準備に時間と労力をかけた授業担当教員にフィードバックされる内容が乏しくなるといった点であった。そこで、本年度は下記に示すような方針で授業公開を実施するよう各学科・教室に呼びかけることになった。

#### (1) 公開する授業の選定

各学科・教室の事情に応じて、公開する授業を選定する。ただし、基本的に、参観者が確保できることを前提条件として実施する。

#### (2) 授業公開の実施時期

授業公開の実施時期は、2006年11月27日(月)から2006年12月8日(金)とする。

#### (3) 授業公開での意見聴取

授業公開は、参観者から聴取した意見を自らの講義に反映させることに一つの意義がある。そこで、下記のように参観者が公開された授業を見る上でのポイントを整理し、参観者からの意見を集める上での一つの参考として授業公開を担当する教員に配布する。なお、下記を利用するか否かは、授業公開担当教員の判断に委ねる。

#### 授業を参観する際のポイント例

##### [授業のわかり易さ]

全体の流れと教育目標が明確か  
当該時限(コマ)の達成目標が明確か  
授業の難易度  
平均的摂大生に適切か  
数式の取り扱い  
学生のレベルを考えて説明しているか

##### [教科書・配布プリントなど教材の選択]

質と量、レベル

##### [黒板やパワーポイントの使い方]

パワーポイントや板書の分量、書き方、まとめ、字や図の大きさ、色などのアクセント、丁寧さ

##### [話しの内容]

重要箇所を明確にしているか  
授業の速さ、ノートがとれるか  
説明が解りやすいか否か  
学生の目線で、学生の思考速度に合わせて、反応を確認しながら話しているか

##### [教員の話し方]

声がよく聞こえるか、明瞭か  
一方的に話しすぎしていないか

##### 間の取り方

教壇上での演技や指示は適切か  
予習・復習のきっかけを与えているか(小テストなど)

##### [学生とのコミュニケーション]

学生を授業に惹き付けているか  
学生側に語りかけて説明しているか  
指名して答えさせる等、緊張感を持たせているか

##### [学生の態度への対応]

学生の私語へ注意しているか  
学生の居眠り、遅刻、受講態度を注意しているか  
着席場所(後ろの方に固まる)に対応・指示しているか

#### (4) 報告書の提出

授業公開実施後は、授業公開担当教員が報告書を工学部 FD 委員会に提出する。報告書には基本情報として 参観者人数、参観者から得られた意見、今後、講義方法の改善に反映できそうな点、授業公開そのものに対する意見(自由記述)の4項目について記載する。

## 2. 授業公開の実施

### (1) 実施科目について

授業公開された科目と担当教員は、各学科・教室から選出された以下の6科目・6名であった。

- ・構造力学基礎・頭井洋教授(都市環境システム工学科)
- ・都市デザイン史(都市計画)・安田孝教授(建築学科)
- ・電子工学概論・芳賀宏教授(電気電子工学科)
- ・機械力学・角家義樹教授(機械工学科)
- ・オペレーションズリサーチ・諏訪晴彦助教授(マネジメントシステム工学科)
- ・微積分Ⅰ・渡会征三助教授(数学物理学系教室)

### (2) 実施結果について

#### a) 参観者人数

参観者人数の平均値は4.3人であった。昨年度後期実施で記録の残っている授業公開(5科目)での平均人数3.4人と比較しても向上したことがわかる。また、昨年度は「参観者なし」といった科目もあったが、今回はそういった極端な例も見られず、各学科・教室での配慮がうかがえた。

#### b) 参観者から得られた意見

本年度は、講義の進度、方法・工夫、学生に対する姿勢に関する意見が多く挙げられていた。講義の進度については、学生に対するわかりやすさを追求するには1回の講義の内容量がやや少なくなったとしても丁寧に進める方がよい、との視点からの意見が多かった。方法・工夫では、講義中の学生の緊張感を維持させるための小テスト、復習クイズなど、答えを学生自身が考える時間をこまめに入れる方法に関心が集まっていた。学生に対する姿勢としては、学生を紳士として扱っている、教室内を歩き回って声をかけている、などが参考になるとの意見が見られた。

#### c) 今後、講義方法の改善に反映できそうな点

多くの先生方が気になっているのは、学生の理解度であるようであった。これはいわゆる Outcomes 評価と呼ばれる「教育の達成度評価」が教員間でかなり意識されていることにも起因した傾向であろう。講義中に対話形式で学生がどの程度理解しているのかを確認しながら授業を進める方法については、これによって集中力のとぎれた学生達もリフレッシュされるのではないかと、との前向きな意見もあった。

#### d) 授業公開そのものに対する意見

継続していくことは重要であるが、教員間で忌憚のない意見交換が実現できなければ、授業公開の効果は半減してしまうであろう、との厳しい意見も見られた。



### 3. 今後に向けて

各学科の事情に合わせて授業公開を実施することによって、参観者人数を確保しようといった当初の目的はある程度達成できたものと考えられる。

その一方で、工学部 FD 委員会では、当初、授業公開について 教員表彰制度との連携、授業アンケート結果の利用、工学部 FD フォーラムとの連動など、他の FD 活動と有機的にリンクさせようとする議論が多くあった。実際には、教員表彰制度は実施に向けて内容を煮詰めていく中途にあったこと、授業アンケート結果にはその利用方法について議論があること、工学部 FD フォーラムは年度末の開催で時期が合わないことなどがあり、本年度については検討の余地を残したままとなっている。授業公開が他の FD 活動から独立したものとして実施され続けるようであれば、形骸化は進む一方となるであろう。FD 活動の全体像を俯瞰した上で、教育システムを構成する上での一部分として授業公開を有効に機能させる検討が、次年度への課題として残されている。

以上

## 法学部 F D フォーラム報告

FD 委員長 法学部 牛丸與志夫

第 1 回法学部 F D フォーラムが、2006 年 12 月 21 日、摂南大学プチテアトルにおいて、「法学部における教育の現状と課題」という総合テーマの下、開催され、多数の法学部の教職員および他学部の教員が参加した。

今回の FD フォーラムでは、まず、法学部小山昇教授が、「入試動向報告」というテーマで、18 歳人口の減少と大学および法学部の入試動向を報告した。特に、2008 年度の全国高校卒業生数が、前年度と比べると、5 万 4 5 0 0 人減少するという予測は要注意であると感じた。摂南大学法学部の難易度ランキングが若干、落ちている点が気がりである。摂南大学法学部のブランド力を向上することが急務であると痛感した。

次に、パネルディスカッションが行われた。

第 1 に、牧田勲教授が、「法学部における日本法史の講義と素材」というテーマで、法学部における日本法史、法学部における学生の現実および講義と素材を報告した。学生に対して実施した「日本史アンケート」の結果、学生の日本史についての知識が少ないことが判明した。そこで、講義については、高校の日本史を前提にして行う授業は、不可能になりつつあると指摘し、絵画を講義の素材にするとか、学外の見学を増やす等の工夫が必要であると述べた。

第 2 に、寺沢知子教授が、「授業手法の工夫と限界」というテーマで、経営情報学部、法学部および薬学部において同教授が担当する科目の授業方法の紹介およびそのまとめを報告した。全体的な傾向として、相対的に学生のレベルが低くなっており、低レベル化に対応する授業方法の開発の必要性を指摘した。また、科目、対象および人数によって、

教え方も問題点も全く異なるという点および 実定法科目の教え方の工夫については、学問的性格から限界があるという点を指摘した。

第3に、河原匡見助教授が、「『成績評価』に関する問題点について」というテーマで、2006年11月実施の「法学部授業公開アンケート」における成績評価についての質問についての回答内容に関して、FD活動における「成績評価」問題の論点ならびに報告者の担当科目「国際関係論」の考查方法および評価付けを報告した。受講生内における格差と一般的な大学生に求められる水準との格差を考慮してどの程度まで、厳格な評価をすればよいかという点を指摘した。そして、学習意欲を高めるために、「学ばなければ大変なことになる」という危機意識を喚起したほうが良いと主張した。

コメンテーターとして、岡部崇明教授および糟谷英之教授（牧田助教授に対して）、那須耕介助教授および木村和成講師（寺沢教授に対して）、かつ亀井紘教授および木村秀一助教授（河原助教授に対して）が、意見を述べた。

以上、第1回法学部FDフォーラムにおいて、法学部の教員が普段から悩んでいる教育をめぐる問題について忌憚のない様々な意見が交換できたことは、大変意義深いことであり、法学部のFD活動を大きく前進せしめたと認識している。

以上

### 第三回外国語学部FDフォーラム報告

FD委員会委員 外国語学部 西川眞由美

摂南大学外国語学部は、2007年2月13日、摂南大学寝屋川キャンパス10号棟3階プチテアトルにおいて、第3回英語教育フォーラム（摂南大学外国語学部主催、寝屋川市教育委員会後援、寝屋川地域連携センター共催）を開催し、慶応義塾大学言語文化研究所教授の天津由紀雄先生をお迎えし、「ことばへの気づきを育てる言語教育」という題目で約2時間にわたりご講演いただいた。当日は、近隣の大学・高校・中学・小学校の先生方および教育関係者のみならず、各大学の院生や学生たちも参加し、会場となった120名収容可能なプチテアトルは空席がほとんどないほどの盛況となった。本講演は、2月27日に寝屋川市明和小学校で行われた小3提案授業「探検！ことばの世界」およびそれに続くシンポジウム「ことばの世界の豊かさ 小学校英語への提言」（寝屋川市教育委員会主催、大阪府教育委員会後援）に先駆けて、それらの理論的説明を目的として行われたものである。

本講演では、公立小学校への英語教育導入の背景と経緯、さらにそれを支持する議論が紹介された後、言語学や脳科学の理論を裏づけられた天津先生の反論を展開され、賛成派の議論がいかに理論的根拠に乏しいかを論じられた。最後に、それに代わるご自身の提言である「母語である日本語を通して言語の普遍的な構造や機能を気づかせることばの教育」の内容と重要性をわかりやすく説明された。

参加者からのアンケートは28枚回収され、今回のフォーラムに対してかなり高い満足度が示された。また、本講演によって、言語教育に関する基本的な知識を確認すると同時

に、「言語教育そのものの重要性」、「母語の重要性」に関する情報が得られ、今まで漠然としていた小学校英語教育導入に関する現状、知識、議論、またそれに対する大津先生の代替案「言葉への気づきを育てる教育」とその重要性に関して、「勉強になった」、「参考になった」などの声が多く参加者から聞かれた。さらに、小学校での「ことばの教育」の後に続く中学・高校・大学での英語教育はどうあるべきか、「英語を使える日本人」を養成するには具体的に何が教育現場に求められるのか、に関するテーマでの講演を求める声も同時に寄せられた。

今回のフォーラムの開催により、次のような効果があったと考えられる。1．公立小学校への英語教育導入に関して、現在どのような議論がなされているのかを理解するのに役に立った。2．英語教育を含む言語そのものの教育のあり方を根本的に考えるきっかけを作ることが出来た。3．本フォーラムを公開することによって、摂南大学外国語学部の活動の一端を地域の教育関係者たち、および他大学の学生たちにも紹介できた。一方、反省点としては、講演の決定が急だったことと、開催されたのが平日の4時からということもあり、広報が十分に行えなかったことと、時間的に小・中・高の先生方の出席が難しかったことがあげられる。今後は講演の日時などに関し、いっそうの工夫が必要であろう。

以上

## 経営情報学部 FD フォーラム報告

経営情報学部 FD 委員会 有馬善一

2007年3月5日(月) 14:30~16:00、11号館8階ゼミ室(5)において、第1回の学部主催のFDフォーラムが開催された。テーマは「基礎演習」および「専門基礎演習」の問題点と今後の授業の進め方について」である。

フォーラム開催に先立ち、基礎演習および専門基礎演習に関する問題意識の共有化を図るためにアンケートを実施した。フォーラムではまずその結果について報告があった後、基礎演習と専門基礎演習を中心に、授業について日頃抱えている問題を率直に話し合う自由討議に移った。

アンケートの結果についての詳細な報告は、学部ホームページに掲載する予定であるが、ここでは紙幅の関係で、重要と思われる点を簡単にまとめておく。アンケートでは基礎演習、専門基礎演習のそれぞれについて、授業の進め方、教材について質問をした。基礎演習は新入生が今後の大学生活を上手く軌道に乗せるためのガイド役となる重要な役割を担っているが、これまでのところ、Freshman's Study Guide 以外には共通教材もなく、授業の進め方も教員の創意工夫に任されているため、授業内容に関しては違いが大きいこと、また、授業の目的の達成度という点でも一般的な授業科目と比べて困難があるということが明らかになった。共通教材については3分の2の教員がその必要性を感じていることがわかった。

ただし、その際、基礎演習が狙いとする基礎学力の中身が問題となる。アンケートの結

果を見ると、一般的な国語力、社会人として身につけるべき敬語などの表現力に重点を置くか、経営学の基礎、日本経済についての「常識」に重点を置くかで意見が分かれた。この点については議論を深めて、コンセンサスを得る必要があると思われる。

次に、自由討論についてであるが、予定の時刻を超過して熱心な議論が交わされた。そこで出されたいくつかの意見を以下に紹介する。教材の内容についてもさることながら、いかに学生に興味を持たせるかという点が重要である。e-ラーニングなど、学生が自主的に学ぶシステムの構築も必要である。学生のレベルの多様化にいかに対応するか、具体的にはどのレベルの学生を対象として授業を進めるかという点を明確化すべきではないか。

基礎演習の授業内容・授業目標をさらに明確化すべきである。また、達成度を測る客観的な尺度が必要である。

学生の学力低下が心配される昨今の状況において、大学入学時における知的訓練、生活面での躰の必要性が高まっていることは、教員間の共通認識となっていると思われるが、基礎演習、専門基礎演習の役割はこの点からみても重要である。今回のFDフォーラムを出発点として、今後も基礎演習・専門基礎演習について、教員相互の意見交換の場を確保していく必要があるように思われる。

以上

# #

第12回全学FDフォーラムに多くの教職員が参加され、活発な討議が行われました。ここにFD委員会委員一同厚くお礼を申し上げます。

2006年度のFDニュースはこの20号で終了です。また2007年度も新FD委員会の構成のもと、教職員の皆様にお目にかかれることを心よりお待ちしております。

# #

#### FD委員会から

今号のFDニュースは授業アンケート、公開、学部FDフォーラム報告集の形になっていますが、特に学部FDフォーラムが活発に行われているのは喜ばしい限りです。

皆様からのご意見を紙面でも紹介したいと考えています。随時、メールで結構ですから、FD委員もしくは教務課までお寄せ下さい。( [kyomu@ofc.setsunan.ac.jp](mailto:kyomu@ofc.setsunan.ac.jp) )

次号のFDニュース第21号は2007年6月頃に発行の予定です。